

SNS 交流と共感力との関係性

Relationship between Communication on Social Network Service and Empathy

○上東 伸洋¹, 北上 大樹¹, 坂部 創一¹, 山崎 秀夫²

Nobuhiro UEHIGASHI, Daiki KITAGAMI, Soichi SAKABE and Hideo YAMAZAKI

¹創価大学大学院工学研究科

Soka University Graduate school of engineering

²常葉大学健康プロデュース学科

Faculty of Health Promotional Sciences Tokoha University

Abstract : We set up the theoretical hypothesis that communication on social network service (SNS) in internet environment improves empathy, real human relations and quality of life (QOL) into a chain reaction. It was investigated and analyzed statistically based on questionnaire surveys of university students in the information sciences, and the hypothesis was analyzed by the structural equation model. The results appeared to verify our hypothesis, and the empathy with communicating on SNS gave real human relations and QOL stronger improvement effects, in comparison with adverse effects on them of SNS tired and Techno-Internet addiction disorder tendency. Moreover, it was suggested that empathy in the real world can be improved by empathy on the Internet.

キーワード : 共感力, SNS 交流度, テクノ・ネット依存症傾向, 人間関係, QOL

1. はじめに

近年, 情報機器やインターネット等の情報環境の発展とともに, 人々のコミュニケーションやメディア利用等の情報行動の量は増加傾向にあり, 種々の情報行動が生活に及ぼす影響を分析することが重要な社会的課題となっている。本稿で分析対象とする情報行動とは, PC やスマートフォンを利用した Facebook, Twitter, LINE 等のソーシャルネットワークサービス (以降 SNS と略す) 上での交流である。その利用程度を意味する SNS 交流度が, 共感力や現実の人間関係及び QOL (Quality of Life: 生活の質) に与える影響を分析することが本研究の目的である。本稿ではネット上における共感力にも着目し, SNS 交流度がネット上の共感力に与える影響とともに, それが現実の共感力に与える影響を調査分析する。また, PC やスマートフォンを利用した過度の SNS 交流度に伴うテクノとネット依存症傾向や SNS 疲れという生活に悪影響を及ぼす負の側面も考慮し, これらの要素を含めても, SNS 交流度が現実の共感力や人間関係, QOL を向上させる有意な関係性が示されるかを分析する。なお本稿での調査対象は, スマートフォンや PC 等の情報機器の過剰利用により共感力や人間関係への影響が懸念される工学部の情報系大学生である。

2. 研究の方法

(1) 研究の手順

ネット共感力・現実共感力・SNS 交流度・現実人間関係良好度・QOL の関係についての理論仮説を設定し, それを検証するため作業仮説を設定する。その作業仮説にもとづいて, 調査票の構成と作成を行い, 調査を行う。この調査データを使用して, 相関分析, 多変量解析 (因子分析・主成分分析・共分散構造分析) を統計ソフトの SAS と Amos の連携の使用で行い, 仮説を検証した。

(2) 理論仮説の設定

本研究における理論仮説は, 「SNS 交流度が高い学生ほど, ネット共感力が高く, それが現実共感力と現実人間関係さらに QOL 向上へと連鎖的な正の関係性を示す」である。本調査で用いた WHOQOL 尺度における QOL の定義は, 「個人が生活する文化や価値観の中で, 目標や期待, 基準または関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」であり,

調査項目は心身や種々の環境への満足度及び生きる活力や楽しさの程度等, 生活全般の質を問うものとなっている (田崎ほか, 1997)。また, ネット及び現実共感力の定義と上記の仮説の根拠を以下に記述する。

共感力においては応用分野が広いこともあり, 種々の定義が存在し統一的に確立された定義はなく, 研究者が分析の目的に応じて定義しているのが現状である。共感とは他者の心理状態へ意識を向けることに始まり, 推測・判断の結果何かしらの情緒的経験へ至るまでの一連の過程と捉えることができる (鈴木ほか, 2000)。このことから, 共感力において, まず共感しようとする意識が重要であり, その意識が共感力を高める基底になると考えられる。これらを考慮し, 本稿では共感力を「他者の心理状態に意識を向け, その情動を理解し共有する能力」と定義した。なお, 共感する主な場面を対面での対話機会の多い現実生活の場とインターネット上を想定し, 共感力のうち前者を現実共感力, 後者をネット共感力と区分した。世界的に利用される既存の共感力尺度としては, Davis (1983) により開発された IRI (Interpersonal Reactivity Index) 尺度があり, わが国では桜井 (1988) のその日本語訳が多く使用されている。しかし, それを構成する下位尺度の一つに空想項目があり, また認知と情動的側面が他の下位尺度に混在化している。本稿では, 対人関係に限定し, それを前述した共感力定義の動機・認知・情動の三要素の視点から分析するために, 空想項目が含まれず, その三要素に対応した 3 つの下位尺度「共感動機」(共感しようとする力), 「認知的共感力」(共感できる力), 「情動的共感力」(他者感情を感じる力) から構成された前村 (2009) の「共感力スケール (EAS: Empathic Ability Scale)」を参考にした。この尺度は現実生活を想定しているため, 現実版の簡易尺度を作成後にそれに対応したネット版尺度を作成した。

次に SNS 交流度とネット共感力及びその 3 つの下位尺度において想定される関係性について述べる。まず SNS 交流度とネット認知的共感力の関係性として, SNS 上の情報や他者とのやり取りから相手の近況や考えを知ることができる, LINE の多種多様なスタンプ機能等の充実した共感機能により, 共感者は相手に容易に共感を示すことができる。

これらや、文章による共感的返信がネット認知的共感力に寄与していると想定される。次に、ネット情動的共感力に関しては、他者の情動状態を共有するためには、相手の表情や仕草などの非言語コミュニケーションによる情報が大きな要因であるが、SNS 上のやり取りは文字によるものが多いため、共感者は主として文字情報から相手の気持ちを想像しなければならない。これは、現実でよく交流する相手ならまだ想像しやすいが、SNS 上の交流はネット上のみの友人や遠くにいる友人との交流も含まれているため、これらを考慮すると SNS 交流度がネット情動的共感力に与える直接的な影響は小さいと推測される。ネット共感動機との関係性については、SNS 上には様々な世代の人や異なる文化・価値観を持つ人々が混在しており、ネット上だけの交流も考えられる。それらの交流において相手を理解しようとし、交流を持続させていこうとすれば、ネット共感動機への促進効果が想定できる。また、SNS の利点として、スマートフォンの普及もあり、いつでも誰とでもコミュニケーションを取ることが可能であるが、SNS 上の交流を維持するためには、相互に共感できる内容を維持することが必要であると考えられ、その努力も共感動機を高め、それが認知と情動的側面へと波及して、結果として下位尺度を全体的に高めると思われる。次に、ネット共感力と現実共感力の想定される関係性について考察する。先行研究にネット上での利他的な情報発信を意味するネット利他が、現実における利他的行為へと波及する効果を検証した研究例がある(乾ほか、2011)。この他者を益するために情報発信の行為を行うネット利他には、場合によって苦しむ他者への共感が潜在的に含まれていると考えられ、共感力にもネットから現実へと波及効果があると想定した。さらに、渋谷ら(2011)の調査において、SNS を利用する目的として「家族や友人・知人とのコミュニケーションを図るために利用する」と回答した人の割合が高いことが報告されており、このことから、SNS による交流がネット共感力も介しながら現実の共感力や人間関係、QOL を良好にしていると考えられる。また、現実共感力が高く相手の気持ちを理解し共有できる人は、他者より良い関係を築いていくことができると思われ、現実共感力が現実の人間関係を良好にし、QOL も連鎖的に向上することが想定される。

一方で、SNS 交流度が高い学生ほどそれに関わる情報機器の利用時間も長く、SNS 疲れやネット依存症傾向が危惧される。また、今回の調査対象は工学部情報系の大学生のため、主に PC の過剰利用を対象としたテクノ依存症、またスマートフォンとの併用によるネット依存症傾向の悪化も考えられる。なお、SNS 疲れ、テクノとネット依存症傾向の定義は、前者を「SNS の過剰利用に伴う精神的・身体的疲労や、自身の発言に対する反応を過剰に気にしたり、知人の発言に返答することに義務感を感じたりするなどの症状」、後者を「パソコンあるいはインターネットへの依存度が高いこと」とした。それらの過剰依存が及ぼす、現実共感力や現実人間関係良好度、QOL への悪影響が懸念される。しかし、本調査と類似の調査対象での柴田ら(2010)の先行研究では、SNS 活用度がそれに伴うテクノ依存症傾向を考慮しても、人間関係良好度と QOL をやや向上させていることが報告されている。そのため本分析において、前述した負の要素を含めても、現実共感力や現実人間関係良好度、QOL に対する影響は、SNS 交流度からの共感力がもたらす向上効果のほうがやや強いと思われる。

(3) 作業仮説の設定

前述した理論仮説を検証するために、複数の構成概念を提示し、それぞれに観察可能な調査項目群を作業仮説として設定した。この構成概念が、理論仮説で設定した関係性

表 1 調査項目一覧 (各構成概念)

番号	(現実共感力)	(総合化のための第一主成分固有ベクトル)
1	相手が何をしてほしいかわかることができる	0.57
2	人の気持ちに敏感である	0.59
3	相手の様子やしぐさから、相手の感情や気持ちを読み取れる	0.57
4*	周りの人たちが悩んだり苦しんだりしていても気にならない	0.57
5*	周りで問題が発生していても、自分に直接関係しなければ気にしない	0.58
6*	気持ちが沈んでいる人を見て、自分はどう感じるということもない	0.59
7	人付き合いでは相手の気持ちをよく考えるようにしている	0.59
8	人々の感情や気持ちを理解しよう心がけている	0.60
9	他者の態度や表情に気を付けるようにしている	0.54
(ネット共感力)		
1	ネット上(パソコン、スマホやタブレット)でのやり取りで、相手が何をしてほしいかわかることができる	0.40
2	ネット上で相手の感情の変化に敏感である	0.43
3	ネット上で相手の感情や気持ちを読み取れる	0.42
4*	ネット上でまわりの人たちが悩んだり苦しんでいる投稿があっても気にならない	0.09
5*	ネット上で不幸な出来事の記事や投稿があっても、自分に直接関係しなければ気にしない	0.10
6*	ネット上で気持ちが沈んでいる投稿を見て自分はどう感じるということもない	0.09
7	ネット上で相手の気持ちをよく考えるようにしている	0.41
8	ネット上で感情や気持ちを理解しよう心がけている	0.42
9	ネット上で他人の投稿やコメントに気を付けるようにしている	0.32
(SNS 交流度)		
1	SNS (Facebook, Twitter, LINE) を利用している	0.39
2	SNS から情報を得ている	0.39
3	SNS で友人(ネット友人・メル友も含む)と会話している	0.42
4	SNS 上で交流することによって、様々な情報や活力を得ることがある	0.43
5	SNS 上で様々な興味や関心を持つ人々と交流する	0.41
6	SNS 上で同じ興味や関心を持つ人々と交流する	0.41
(SNS 疲れ)		
1	SNS 上で友人と交流していて精神的疲労を感じることがある	0.50
2	SNS 上で周囲の反応がないと不安に感じる	0.48
3	SNS 上で反応(コメントやいいね等)することに義務感を感じて疲れる	0.53
4	SNS の使用後に身体的疲労(目が疲れる、睡眠不足等)を感じることがある	0.49
(テクノ依存症傾向)		
1	パソコンをよく活用する(パソコンゲームを含む)	0.25
2	パソコンが好きである(パソコンゲームを含む)	0.27
3	パソコンの前で座るとほっとする	0.37
4	パソコン作業に没頭して時間を忘れたり、ほかの用事を忘れたりすることがある	0.34
5	イエスカノーかをはっきり言わない人にイライラする	0.15
6	話をするときに結論を早く言ってほしい	0.14
7	自分に無駄なことにエネルギーを使いたくない	0.19
8	パソコンや人の反応が遅いとイライラする	0.26
9	長時間パソコン作業をした時は周囲の状況をすぐに把握できない	0.24
10	日ごころいって歩くことが多い	0.12
11	パソコン作業の後なかなかパソコンのことが頭から離れない	0.37
12	パソコン作業中に話しかけられたりすると腹が立つ	0.33
13	ネット上(パソコン、スマホやタブレット)だけの友人の数が現実生活の友人より多い	0.19
14	ネット上での交流の方が現実生活での人との交流よりも楽しい	0.24
15	ネット上で実名や素性を知らない友人が多い	0.22
(ネット依存症傾向)		
1	ネットに夢中になっていると感じることがある	0.35
2	ネットで充足感を得るために、より多くの時間を費やす必要を感じる	0.39
3	ネットの使用時間をコントロールしようとして何度も努力し、失敗した経験がある	0.40
4	ネットの使用をやめようとしたとき、気分が落ち着かなかつたり、意欲が消失することがある	0.37
5	予定よりも長時間、オンラインの状態が続くことがある	0.38
6	仕事、大学などにおける大切な人間関係を、ネットが原因でなくしてしまいそうになったことがある	0.23
7	過度なネットの利用を隠すため、家族や友人に嘘をつくことがある	0.31
8	現実逃避や、不快感(無力感、罪悪感、心配、抑うつなど)から逃れる目的でネットを使うことがある	0.37
(現実人間関係良好度)		
1	現実世界において、喜びや苦しみを共有できる友人に恵まれている	0.48
2	現実世界において、側についてリラックスできる友達が多い	0.53
3	現実世界でよく対話をする	0.49
4	現実生活での友人は多い	0.51
(WHOQOL)		
身体的関連 6 項目、心理的関連 7 項目、社会的関連 3 項目、環境的関連 8 項目、項目の計 24 項目		

注) 固有ベクトルは、構成概念ごとの総合点(第一主成分得点)算出用係数を示す。

を示すかどうかを検証することになる。PC 利用では、オフラインとオンラインとは SNS 利用時に切り替えられ、これ

は繰り返し循環することもあり、後述する図1のパス図では、テクノ依存症傾向とネット依存症傾向の両尺度得点を合計したものをテクノ・ネット依存症傾向として設定している。なお、依存症であるかどうかは、専門医の面接診療で最終判断されるので、本稿ではこの尺度値が高くなることをテクノ・ネット依存症傾向と表現する。QOL(田崎・中根, 1997)、テクノ依存症傾向(春日・高橋, 1996)、ネット依存症傾向(ヤング, 1998)、現実人間関係良好度(吉水, 2013)は先行研究に準じた調査項目を設定した。また、SNS交流度、SNS疲れは定義をもとに調査項目を作成した。これらの構成概念の信頼性と妥当性を各種検証したうえで分析を行った。各構成概念に対して設定した具体的な調査項目は、表1に示すとおりである。またWHOQOLとはWHOが開発したQOLの指標で、今後のQOLのグローバルスタンダードの候補でもあり、種々の生活要素への満足度等から構成されている(田崎, 1997)。

(4) 調査の方法

このような仮説に基づいて、表1に示す項目で調査票を設計し、2015年11月18日～12月2日に授業等を利用して調査を行った。具体的には、調査対象の学生に対して自由意思による無記名式アンケートを実施したが、その協力依頼において事前事後にわたり十分に倫理的な配慮をした。このデータで信頼性・妥当性を検証した後に仮説を検証した。調査対象は、日頃オン・オフラインを含めた情報環境に接することが多いA大学の工学部情報系大学生を対象とした。その内訳は、有効回答数は290人(母集団:355人、回収率81.7%)であった質問形式は5段階評定法(最低1点、最高5点)であり、QOL・テクノ依存症傾向・現実共感力・ネット共感力・現実人間関係良好度の5つの構成概念においては「あてはまらない、あまりあてはまらない、どちらでもない、ややあてはまる、あてはまる」の中から選択する形式をとった。また、SNS交流度・SNS疲れ・ネット依存症傾向の3つの構成概念においては「少ないorない、やや少ない、中程度、やや多い、多い」の5段階評定法を採用した。また、各調査項目は、原則として得点が高い人ほど各構成概念が高位であることを示すように設定した。しかし、回答のしやすさを考慮して、問の方向性を逆にしている項目があるが、分析時には得点を逆変換している。

3. 結果と考察

(1) 信頼性・妥当性の検証結果

現実共感力及びネット共感力は2.2の理論仮説の設定で説明したように今回新たに作成したため、この両尺度の信頼性と妥当性を検証する。まず回収した調査データをもとに、現実共感力及びネット共感力のみで因子分析(斜交回転)を行った。その結果、現実共感力においては固有値1以上の3因子において、因子負荷量が0.3以上のデータを選択してグルーピングされたのが表2である。各因子の α 係数は0.7以上であり、尺度全体の α 係数も0.81と良好な信頼性を有している。また、3因子が抽出されたことから、因子的構成概念の妥当性も検証された。また、ネット共感力においても現実共感力の結果と同様に良好な信頼性と妥当性を示した。このネット共感力の調査項目を設定するに当たり、各調査項目はネットに対応した表現に変更している。なお、今回の簡易版共感力尺度の基準関連妥当性を検証するために、本調査の前に同大学の学生200名に、今回の共感力簡易尺度と2.2で述べたIRI尺度の調査項目のみで事前調査を行った。このIRI尺度における空想項目以外の調査項目の総合点と現実共感力簡易尺度総合点との相関係数は、0.6(1%以下で有意)と高い値を示し基準関連妥当性も検証された。テクノ依存症傾向、ネット依存症傾向とWHOQOLは、前述の引用した先行研究も含めてその

表2 現実共感力構成項目の因子分析結果

因子	調査項目内容 (一部省略形)	因子 負荷量	因子名 固有値 α 係数	固有 ベクトル
(1)	2 人の気持ちに敏感である方 1 相手が何をしてほしいかが察知できる方 3 相手のしぐさから、気持ちを読み取れる方	0.91 0.85 0.79	現実認知的共感力 2.45 0.89	0.59 0.57 0.57
(2)	6 沈んでいる人を見ても、どう感じることもない 5 問題が発生しても、関係なければ気にしない 4 周りの人が悩んでいても気にならない	0.88 0.83 0.80	現実情動的共感力 2.40 0.87	0.59 0.58 0.57
(3)	8 人々の気持ちを理解しようと心がけている 7 相手の気持ちをよく考えるようにしている 9 他者の態度や表情に気を付けている	0.94 0.83 0.69	現実共感動機 3.35 0.86	0.60 0.59 0.54

注) 調査項目内容の左の番号は表1の項目番号を示している。表1の番号右に*がある項目は、得点と項目内容を逆方向に変換している。全体の α 係数は、0.85である。
固有ベクトルは、各因子別の総合点(第一主成分得点)算出用の係数である。

表3 ネット共感力構成項目の因子分析結果

因子	調査項目内容 (一部省略形・ネット上限定)	因子 負荷量	因子名 固有値 α 係数	固有 ベクトル
(1)	3 相手の感情や気持ちを読み取れる方 2 相手の感情の変化に敏感である方 1 相手が何をしてほしいかが察知できる方	0.96 0.92 0.77	ネット認知的共感力 2.60 0.92	0.59 0.59 0.55
(2)	5 不幸な記事があっても気にしない 6 沈んでいる投稿を見てどう感じることもない 4 苦しんでいる投稿があっても気にならない	0.87 0.87 0.78	ネット情動的共感力 2.42 0.88	0.59 0.58 0.56
(3)	8 相手の気持ちを理解しようと心がけている 7 相手の気持ちをよく考えるようにしている 9 他人の投稿に気を付けるようにしている	0.97 0.81 0.63	ネット共感動機 2.35 0.86	0.61 0.59 0.52

注) 調査項目内容の左の番号は表1の項目番号を示している。表1の番号右に*がある項目は、得点と項目内容を逆方向に変換している。全体の α 係数は、0.80である。
固有ベクトルは、各因子別の総合点(第一主成分得点)算出用の係数である。

表4 各構成概念の因子分析結果

因子	調査項目内容 (一部省略形・ネット上限定)	因子 負荷量	因子名 固有値 α 係数
(1)	6 SNS上で同じ興味や関心を持つ人と交流する 5 SNS上で様々な興味や関心を持つ人と交流する 4 SNS上で様々な情報や活力を得ることがある 3 SNSで友人と会話している 2 SNSから情報をたくさん得ている 1 SNSを利用している方	0.87 0.85 0.84 0.76 0.71 0.68	SNS交流度 4.15 0.91
(2)	3 SNS上で反応することに義務を感じて疲れる 4 SNSの使用後に身体的疲労を感じる 1 SNS上で交流して精神的疲労を感じる 2 SNS上で周囲の反応がないと不安に感じる	0.81 0.65 0.63 0.58	SNS疲れ 2.36 0.77
(3)	2 側についてリラックスできる友達は多い 4 現実生活での友人は多い方 1 喜びや苦しみを共有できる友人に恵まれている 3 現実世界でよく対話をする	0.85 0.78 0.74 0.73	現実人間関係良好度 2.81 0.86

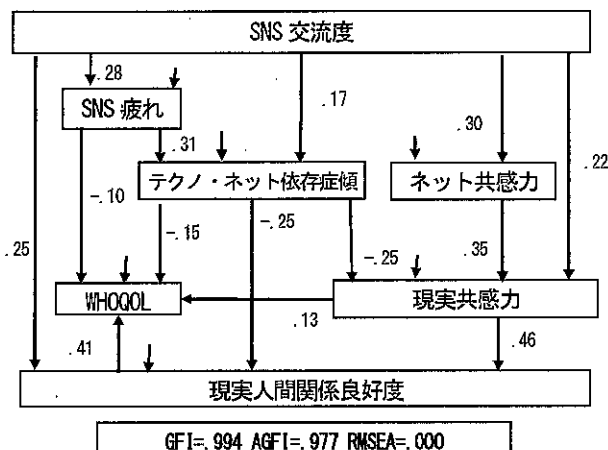
注) 調査項目内容の左の番号は表1の項目番号を示している。
表1の番号右に*がある項目は、得点と項目内容を逆方向に変換している。

信頼性・妥当性が検証済みで、一般化された尺度として確立されている。そこで、それ以外の尺度の構成概念に関わる調査項目で、信頼性と妥当性を検証するために因子分析(斜交回転)を行った結果、3因子が得られ、想定した構成概念と一致し、因子的構成概念妥当性が検証された(表4)。 α 係数も基準を満たしており、各尺度として構成概念がそれぞれ統一的に形成されていることが分かる。

(2) 共分散構造分析による因果推定モデル

共分散構造分析を適用して、因果推定モデルを作成するための参考資料として使用するために、相関分析を行った。そのために、まず前述の因子分析でデータの背後にある潜在因子を確認した各構成概念を総合化した。その方法には、単純加算と主成分分析による第一主成分得点の二種類があるが、後者を適用した。その理由は、各変数間の相関関係が強い変数ほどウェイトが高く総合値の精度が向上するからである。なお、第一主成分が総合的な主成分であるかどうかは、第一主成分得点を求めるための固有ベクトルが全て正の値であるかどうかで判断した。その結果、該当の係数は全て正の値を示した。その得点算定のための固有ベクトルは表1～3に示している。

この相関分析から、共変関係の程度が把握できるが、因



注) 誤差変数は↓のみで示し、パス係数は全て5%以下で有意であり少数点前の0は省略している。分析ソフトはAmosを使用し、適合度基準はGFIとAGFIが0.9以上でRMSEAが0.05以下とした。

図1 共分散構造分析による因果推定モデル

果関係の方向性は分析できない。そこで、共分散構造分析を適用して、因果推定モデルを作成した。モデルは、前述の構成概念間の相関関係を参考にしながら仮説以外の考えられるパス経路も設定し、分析用に用いたソフト (Amos) の給当たり機能を活用しながら因果関係の複数の候補モデルを作成した。その後、因果的方向性の合理性や各種適合度指標を参考にしながら、最終的なモデルを確定した。なお、今回は構成概念とその構成要素数が多いので、構成概念を観測変数として扱い、そのデータは前述の第一主成分得点を適用した。図1がその因果推定モデルのパス図である。図の下に示している GFI, AGFI, RMSEA の値から適合度は良好である。

この図から、理論仮説における SNS 交流度からネット共感力、現実共感力、現実人間関係良好度、QOL を連鎖的に向上させる直接的な有意な関係性が示されている。この関係性を順に詳しく考察してみる。SNS 交流度からネット共感力へ直接的な正の関係性は、SNS 上における交流によってネット上の共感力が高まる可能性を意味する。また、SNS 交流度からネット共感力を経由し、現実共感力へと向かう間接的な関係性や、さらに SNS 交流度から現実共感力へ直接的な正の関係性も見られた。次に、ネット共感力と現実共感力の関係性について着目する。ネット共感力から現実共感力へ直接的な正 (0.35) のやや強い関係性が見られた。これは、ネット上での共感力を高めている人ほど現実共感力も高いことを示している。逆の因果の可能性もあるので、図1のパス図におけるネット共感力と現実共感力のみをパス経路を逆方向にしたところ、各種適合度指標の値が全て低下した。これから、今回のケースでは共感力に対してネットから現実への波及効果のほうが強いことが示唆された。また、現実共感力は現実人間関係良好度への正 (0.46) の直接的な高い関連性が見られ、人間関係における共感力の重要性が示唆される形となった。さらに SNS 交流度から現実人間関係良好度への直接的な正 (0.25) の関係性が見られ、SNS 利用が対面する機会の多い人との紐帯を強めることが示唆された。一方、過度な SNS 交流度は SNS 疲れやテクノ・ネット依存症傾向を悪化させ、現実生活における対人との交流時間が減少することでその人間関係良好度を低下させる間接的な負の関係性も見られた。SNS 交流度の現実人間関係に対するこの負の関係性と、前述した正の関係性を相殺した値は 0.31 と正の総合効果を示した (図2)。さらに、現実人間関係良好度から QOL への直接的な正

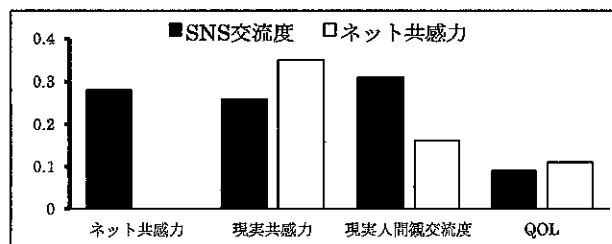


図2 SNS 交流度とネット共感力が各構成概念に及ぼす標準化総合効果比較

(0.41) の強い関係性が見られた (図1)。しかし、SNS 交流度が QOL に与える総合効果は、図2から 0.09 とわずかに正の効果を示すのみとなり、SNS 疲れやテクノ・ネット依存症傾向の悪影響を軽視できない結果となった。このことから QOL 向上のために、SNS を利用する際には、適度な利用時間の範囲内で、ネットや現実の共感力を高めていく意識も有用であることが示唆された。

4. おわりに

仮説「SNS 交流度が高い学生ほど、ネット共感力が高く、それが現実共感力と現実人間関係さらに QOL 向上へと連鎖的な正の関係性を示す」は、図1のモデル全体が基準を満たす良好な適合度を満たし、さらに上記仮説の因果関係性に該当するモデル内におけるパス係数の統計的有意性が示されたことから検証された。さらに、ネット共感力から現実共感力への正の関係性が強いことから、共感力においてネットから現実への効果をより生かしていく視点も有用であることが示唆された。今後は、共感力をより向上させるネット利用法の調査を継続しながら、複数の大学でのケーススタディを積み重ね、最終的に縦断調査で一般化に至るかどうかを検証していきたい。

参考文献

- Davis, M.H. (1983) Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113~126.
- 廣田智明・坂部創一・尾関邦義・山崎秀夫 (2013) インターネットとソーシャルのコミュニケーション利用が対話力に及ぼす影響に関する研究. *環境情報科学 学術研究論文集*, 27, 369~374.
- 乾貴史・坂部創一・山崎秀夫・守田孝恵 (2011) インターネット環境における利他的情報発信が QOL に与える影響. *環境情報科学論文集*, 25, 449~454.
- 春日伸子・高橋明 (1996) テクノストレス症候群の傾向の検査尺度用質問紙を用いたテクノストレスの自己管理. *心身医*, 36(6), 484~488.
- キンバリー・S. ヤング (1998) インターネット中毒—まじめな警告です. 毎日新聞社, 東京, pp.
- 小池はるか (2003) 共感性尺度の再構成—場面想定法に特化した共感性尺度の作成—. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学*, 50, 101~108.
- 前村奈央佳 (2009) 共感力と異文化需要態度との関係性—ゲーミング・シミュレーション実験による検討—. *Journal of Intercultural Communication*, No. 12, 64~84.
- 桜井俊男 (1988) 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて—. *奈良教育大学紀要*, 149~154.
- 柴田雅雄・坂部創一・山崎秀夫・守田孝恵・張建国 (2010) 良書の読書と CMC が文章と口語の主観的な表現力に与える影響の研究. *環境情報科学論文集*, 24, 339~344.
- 渋谷明子・志岐裕子・李光鎬 (2011) SNS 利用者のコミュニケーションとテレビ視聴—ウェブモニター調査 (2011年2月) の報告 (2)—. *メディア・コミュニケーション: 慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所紀要*, 62, 57~68.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷裕子・谷口ゆき・野田勝子 (2000) 多次元共感尺度作成の試み. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学*, 47, 269~279.
- 田崎美代子・中根允文 (1997) WHOQOL 短縮版とその手引き. 金子書房東京, 33pp.
- 吉水湧樹・坂部創一・山崎秀夫 (2013) 情報環境におけるテクノ依存症傾向が及ぼす新型うつ傾向の抑制要因. *環境情報科学研究論文集*, 28, 337~342.